

オプション教材ヤマブキ 読解マラソン集



読解問題のもとになる長文です。読解問題をやる人は、時間のあるときに読んでおきましょう。

読解問題は、清書の週で時間があまったときにやってください。時間がないときは、やらなくていいです。

読解問題は、選択式問題の解答のコツをつかむために行います。適当に全問やるのではなく、一問か二問でもいいですから確実に正解にするつもりでやってください。

読解問題の答えを作文用紙に書く場合は、問題の番号と答えがわかるように書いてください。書き方は自由です。読解問題の用紙は返却しませんが、選んだ番号と正解は「山のたより」に表示されます。

読解マラソンの問題のページから答えを送信すると、その場で採点結果が表示されます。（この場合、作文用紙に答えを書く必要はありません）

▼作文用紙に答えを書く場合（書き方は自由です。作文用紙の余白などに書いても結構です）

▼読解マラソンのページから答えを送信する場合（この場合作文用紙に答えを書く必要はありません）
<http://www.mori7.net/marason/ki.php>

1.

2.

3.

4.

5.

その日、天気はよかったが昼になっても外気はあたたまることなく、寒さは人々のからだを縮み上がらせていた。日ごろは、いたずら盛りの中学生をのみ込んで活気があふれている校舎も、なんとなくふんいきが沈んでいるようにみえた。もつとも、ふだんのように喚声が聞えないのは、その日が年の瀬をひかえた二学期の終業式ということもあった。式の後、クラスでの行事が終わると、近井正治はだれよりもはやく教室を飛び出した。彼は人かげのない運動場を横切つて、一刻も早く校門を出ようと思つていた。しかし、十メートルも走らないうちに、正治は足がもつれてつんのめつた。災難に会つてゐる彼には非情な表現になるかもしれないが、うつぶせに倒れてゐる正治の姿態は、はたから見るとみじめでぶざまだった。瞬間のことではあるが、正治は失神してゐたのであろうか、意識をとりもどし、頭をもたげて前方を見ると、目の前の運動場が折れ曲がつて、端の方からかぶさるようにながつてくる。そして彼自身は、足の方からもち上げられて逆さにのめり込んでいくような気がした。いつの間にか、周囲には人だかりがしてゐた。正治のクラスメートたちだった。

「何を見てゐるんだ。」
正治はそう言いながら両手をついて立ち上がろうとしたが、右のふくらはぎに激しい痛みを覚えて、そのまま突つ伏した。みんな、おれをみておもしろがつてゐるな、彼はくやしくてならなかったが、どうにも身動きできなかった。

二年生の中ほどに、都会から田舎の中学に転校して来た正治は、そこでの自分の身の処し方を考えた。まちでは、大人も子供も如才なく人と接触する。けれども、まるごとの人間関係に支えられてゐる田舎には、都会のような気やすいものはみられない。そういうところでは違和感を持ち、彼は自分の居住地の風土に容易になじもうとはしなかった。むしろ、集団の中で「我」を通すことによつて、都会育ちの自らの存在を誇示しようとした。しかし、結果は逆だった。周囲は自然に冷たくなり、正治は集団から、逃げ出すことばかりを考えていた。それは三年生になつても変わることがなかった。

「近井、どうだい。」

担任の友田先生が、遠山らのクラスの代表数名と共に見舞いにやつて来た。正治はアキレス腱が切れていて、あの日病院にかつきこまれてそのまま入院してゐた。正治は、クラスメートの心配してくれてゐる顔を見ると、今までとんでもないまちがいを犯してきたように思ひはじめた。

「思春期つてのは、自分が見えないんだよ。それを確かめようとして、いろんな形で自分を表そうとする。しかし、その自己表現のしかたがたとえまちがつてゐることがわかつてても、こんどはわかつてゐることを認めたがらないんだよ。」考えこんでゐる正治に先生が独り言のように言う。弱り目にある者に追い打ちをかけやがつて。正治はうらめしげに先生をにらみつけたつもりが、その目に涙がにじんだ。涙がつくり出したレンズで、そばでほほえんでゐる遠山の顔をみると、正治はそれを純粋に受けとめることができた。

(中西幸雄「友情」)



私がエベレストを初めて見たのは、ちょうど一年前、十二月二十九日であった。ネパールの首都カトマンズから飛行機で飛んできたシャンポチエの部落から少し歩いて、イムジャ・コーラの谷の奥への展望が開けたとたんに、エベレストが見えた。世界の最高峰というのは、やはり見るだけでも感動的なものである。その頂からは、東の方へちぎれ雲がのびている。ジェット・ストリームが山にぶつかってできる大気の波動が作る雲である。

そんな雲を眺めながら、私は、エベレストの高さは何で決まるかと考えたことを、思い出した。

最近、中国の登山隊が、頂上に反射鏡を置いて高さを再測したと伝えられるので、あるいは少し変わるかもしれないが、エベレストの高さは、今のところ、八、八四八メートルとされている。あるとき、私は、この高さが圏界面の高さに近いことに、あらためて気づいた。圏界面とは、地面近くにある対流圏と、その上にある成層圏との境めで、地上から昇った空気は、ここでいちおう止められる。いわば、大気为天井である。その高さは、熱帯で高く、極で低く、季節によって変わる。エベレストのあたりでは、冬に約一万メートルの高さにある。最近のジャンボ・ジェットが飛ぶ高さである。

エベレストの高さ約九千メートル、圏界面の高さ約一万メートル、ざっと似た値である。だが、この二つを結びつけて考えた話は聞いたことがない。偶然の一致とかたづけることもできるが、いったん二つを結びつけると、私には、それが比例関係をもつように思えてきた。

例えば、こんな説明である。さきに書いたように、圏界面は地上からの空気が昇るいちおうの限界で、水蒸気が豊富なもの、ここまでである。だから、私が見た、エベレストから風下へのびる雲は、いわば、雲の上限に近いものである。圏界面の上では、水蒸気が少なくなり、雲もないといってよい。そこで、エベレストに限らず、ヒマラヤの高峰の頂上に降り注ぐのは、雲にさえぎられることのない「裸の太陽光線である。岩肌は、それで暖められる。だが、夜になると、岩の放射冷却をさえぎる雲も、まだ、ない。だから

岩肌は急速に冷やされる。

こうして、昼と夜とで、加熱と冷却が激しく繰り返されると、岩石の風化が進行する。岩肌についた雪は、昼には溶けて割れめにしみ込み、この水が夜には凍ってふくらみ、割れめを拡大する。この作用は低地でも働くが、圏界面の近くでは、特に激しい可能性がある。

そこで、造山運動によって、じわじわと盛り上がってきたヒマラヤの高峰は、この圏界面付近の激しい風化作用で削られる。だから、エベレストは圏界面よりやや低く、八、八四八メートルなのではないか、もし圏界面がもっと高かったら、それに応じてエベレストも今よりずっと高いかもしれない。

これが私の推論である。アイデアとして地球科学を専攻している友人に話すと、おもしろがられる。山の高さの上限について考えた人は、あまりいないらしい。

(樋口敬二「エベレストはなぜ八、八四八メートルか」)



犬と人間の歴史をふりかえってみると、哺乳類という共通点はあつても、先祖はまるで違う別の動物だということが分かります。

だが、人間にとっていちばん身近にいて親しい動物は犬です。それも昨日今日のつき合いではない。数万年も昔から、人間と犬はごく身近に暮らしてきた仲です。

まず考えられることは、そばにいればお互いに得になることがあったということでした。

人間の祖先が木の上から下りて、地上で生活するようになってから、最も警戒しなければならなかったのは、大きな猛獣たちでした。

その猛獣たちは、時代や場所によっても違いますが、たとえば、ライオン、サーベルタイガー、トラ、クマ、サイ、イノシシなどに人間の住まいが襲われたら、ひとたまりもありません。

一方、犬たちにとっても、これらの猛獣は最も警戒する敵だったのです。そこに数万年も前に人間と犬が接近した問題を解く鍵があるようです。

森の中で生活している類人猿たちの食物は、植物が主食です。木の葉や果実、木の実などです。動物性の食物は昆虫ぐらいなものです。だが、地上に下りた人間の祖先は、肉食獣と同じように狩猟をする必要がありました。彼らは大きな草食獣を倒すためには、鋭い牙や爪のかわりに石で武器を作ることになりました。

石の剣は槍の先に結ばれて、草食獣たちには投げ槍になって飛びました。投げる槍に勢いをつけ、命中率を高くする「アトラトル」という道具を、弓矢を発明する前に発明していたのです。

当時の狩猟法は投げ槍で獲物を倒したり、落とし穴に追い込むと、上から石を投げたりして殺しました。

捕えた動物は食べるだけでなく、生活のために利用できるものなんでも利用していました。シベリア地方には、二万年近い昔に作られた人間の家が残っています。それは数十頭のマンモスの骨を解体して作ったものです。骨を積みあげて、その上にはマンモスの皮をはいでかぶせたものです。いまでも、シベリアにはトナカイを従えて遊牧しているエスキモー民族の部族がありますが、その人た

ちが宿泊するときに建てるテントの幌は、トナカイの皮で出来たものです。この家は石器時代の名残りといえるでしょう。

このように石器時代の人間は、動物を捕えたら解体しましたから、その住居のあとには、残りのものを捨てる場所がありました。

トラやライオンなら、獲物の大半は食べ尽くせますが、人間はそうはいきません。利用できるものは利用した後でも、骨や噛みきれない硬い筋などが残ります。そういう廃物を捨てておくと、それが犬にとっては魅力のある食物になったのです。

犬たちはむろん自分たちの獵はしますが、不獵のときは人間の住まいのそばの捨てたものを狙うことも覚えたのでした。

犬にとって、人間に近づきすぎるのは危険です。人間は犬も狙うからです。犬は食料にもなるし、毛皮は利用価値が十分にあります。だが、あるときから人間は、犬がそばにいと便利なことに気づきました。

それは犬は猛獣が近づくことをいち早く知るからです。犬は自分の仲間たちに、危険を知らせるための遠吠えをしますが、それはそのまま人間への合図になりました。とくに視力がまったく役立たなくなる夜間に、犬が近くにいることは、心強いことでした。

また、人間は犬が天候の異変に敏感に反応することも分かったのです。とくに大雨になるようなときは大急ぎで自分の巣に帰っていくので分かりました。

それは犬は人間よりもはるかに鋭い嗅覚と聴覚を持っていたから、遠くからの匂いや物音に敏感だったからです。

このように犬がそばにいるほうが便利だということが分かってから、人間は犬が住居の近くにきて、捨てたものを餌として食べてもその犬を捕えようとはしなくなったのでした。

(沼田陽一「もし犬が話したら人間に何を伝えるか」)



私たちはこれまで、木は時代遅れの原始的な素材だと思っていた。だからそれに新しい技術を加え、工業材料のレベルに近づけることが進歩だと考えた。その結果、改良木材と呼ばれるものが次々に生み出された。それらは従来の木の欠点を補い、大量の需要に応じ、生活を豊かにするのに大きく役立ってきた。たしかに木材工業は発展したのである。

だが一方、最近になって、一つの疑問が持たれはじめてきたように思う。それは木というものは自然の形のまま使ったときが一番よくて、手を加えれば加えるほど本来のよさが失われていくのではないか、という反省である。考えてみるとそれは当たり前のことだったかもしれない。木は何千万年もの長い時間をかけて、自然の摂理に合うように、少しずつ体質を変えながらできあがってきた生き物だったはずである。木は自然の子で、そのままが最良なのである。

だから木を構成する細胞の一つ一つは、寒いところでは寒さに耐えるように、雨の多いところでは湿気に強いように、微妙な仕組みにつくられている。あの小さな細胞の中には、人間の知恵のはるかに及ばない神秘がひそんでいるとみるべきであろう。それを剥いだり切ったり、くつつけたりするだけで、改良されると考えたこと自体、近代科学への過信だったかもしれない。

木を取り扱ってしみじみ感ずることは、木はどんな用途にもそのまま使える優れた材料であるが、その優秀性を数量的に証明することは困難なことである。なぜなら、強さとか、保湿性とか、遮音性とかいった、どの物理的性能をとりあげても、木はほかの材料に比べて、最下位ではないにしても、最上位にはならない。どれをとっても、中位の成績である。だから優秀性を証明しにくい、というわけである。

だがそれは、抽出した項目について、一番上位のものを最優秀だとみなす、項目別のタテ割り評価法によったからである。いま見方を変えて、ヨコ割りの総合的な評価法をとれば、木はどの項目でも上下に偏りのない優れた材料の一つということになる。木綿も絹も同様で、タテ割り評価法でみていくと最優秀にはならない。しか

し「ふうあい」（繊維の手ざわりや見た感じ）まで含めた繊維の総合性で判断すると、これらが優れた繊維であることは、実は専門家のだれもが肌で知っていることである。総じて生物系の材料というものは、そういう性質をもつもののである。以上に述べたことは、人間の評価のむずかしさにも通ずるものがある。二、三のタテ割りの試験科目の点数だけで判断することは、危険だという意味である。たしかに今の社会は、タテ割りの軸で切った上位の人たちが、指導的役割を占めている。だが実際に世の中を動かしているのは、各軸ごとの成績は中位でも、バランスのとれた名もなき人たちではないか。頭のいい人はたしかに大事だが、バランスのとれた人もまた、社会構成上欠くことのできない要素である。だが今までの評価法では、そういう人たちのよさは浮かんでこない。思うに生物はきわめて複雑な構造をもつものだから、タテ割りだけで評価することには無理があるのであろう。

（小原二郎）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

古くから森林は人間に木材を供給し続けてきた。特に雨の多いわが国にあつては、森林はつねに身の回りに存在し、それからの産物としての木材は建造物から日常の道具まで、ありとあらゆるものに使用されてきた。

数々の遺跡発掘は、先史時代のわれわれの祖先が木材を使いこなし、いたことを教えてくれる。何千年も昔、すでに祖先たちは単に木材を使うだけでなく、用途に応じて樹木を使い分けることを知っていた。たとえば、弓には弾力性のあるカシヤトネリコの類を、板には割りやすいスギをという具合に、木材の材質を知り、適材を適所に用いていたという。

『古事記』や『日本書紀』には、二七科四〇属、五三種の樹木が現れるという。そして、『日本書紀』の記載によれば、素盞鳴尊がひげやまゆの毛を抜いて散らしてヒノキ、スギ、クスノキ、マキの樹木を生やし、ヒノキは宮殿に、スギとクスノキは舟に、マキは棺に使用と教えたのである。

このように、日本人と木材のつきあいは古い。森林から採れる木材は、身近な物質資源であるだけでなく、工作が容易で性質も優れた好材料であった。日本文化は木の文化であるといわれるほど、木材はわが国の歴史を支えてきた。

燃料としての木材も広く使用されてきた。森林からの柴、薪、炭は、つい先ごろまでわが国の主力燃料であつたといつてよい。現在は石油燃料がとつてかわり、山小屋のストーブも石油で燃える時代である。今や、わが国の燃料としての木材需要量は、全木材需要量の一パーセントにも満たない。しかし、全世界ではまだ四七パーセントが燃料材、わが国の現状からは想像もつかないであろう。

森林の落葉や下草が農業生産を支えてきたことも見逃せない。落葉や下草は農地に入られて有機肥料としての役割を果たしてきたのである。特に中世以降、落葉を随時採取してきて積み重ね、堆肥化してから農地に施す技術が発達し、農村周辺の森林、いわゆる里山林は農地と切っても切れないきずなに結ばれてきた。そして、この里山からの肥料供給も、化学肥料が普及するつい先ごろまで続けられていたのである。かつて落葉採取の利権をめぐる血を見る争いさえあつたとは、いまだれが想像しえよう。

さて、森林が人間に与える恩恵は、木材等の林産物、物質資源だけであろうか。じつは物質資源を供給してくれるのは、森林の恩恵の一部分に過ぎず、そのほかにもいろいろの恩恵を森林はわれわれ人間に与えてくれているのである。ただ木材供給のような有形的な森林の働きは目立ちやすいが、森林が存在することによって生ずる人間生活環境の保全といった無形的な働きは目立たない。人間は知らず知らずのうちにその無形的な働きの恩恵をこうむつてきていたのである。

森林に林産物供給という有形的効用と並んで、環境保全という無形的効用を期待するのは、何も今日の問題ではない。明治時代の林学（森林や林業の学問）の教科書にも「森林というものは、ただ木材を産出するだけのものではない。気候条件をおだやかにしたり、水源を養うなど、間接的に国土保安、人畜の生活を保護する効益は非常に大きなものである。」といった論説が見られ、また為政者も森林所有者もこれを当然のことと受け取つていた。さらに時代をさかのぼれば、いわゆる治山治水ということが、林業という経済行為と表裏一体のこととして扱われてきたのは、林業史に明らかである。

しかしながら、昭和三十、四十年代の経済最優先の社会情勢は、為政者も林業者も、そして場合によつては林学者をも木材生産という有形的な経済行為にのみ熱中させてきた。その反動として森林の環境保全的効用が見直され、社会的な話題として採り上げられるようになったのは、昭和四十年代もようやく後半になつてからである。

森林の環境保全的な効用、これに対する社会の期待は大きい。現在、もはや森林を木材資源としてのみ認めることは許されない。そして、今後は森林を、人間生活を保全するもの、すなわち森林を生活環境そのものとみる見方はますます色を濃くするであろう。森林は環境を供給する役目を負うという考え方からいけば、森林は物質資源であるばかりでなく、環境資源でもある。

（只木良也「人間生活を守る森林」）



旧校舎のあとには、ながいこと、土台石がそのままに残されていて、その白ちやけた膚を、雑草の中からのぞかせていた。次郎はそれを見ると、泣きたいような懐かしさを覚えた。彼は、学校の帰りなどに、仲間たちの目を忍んでは、よく一人でそこに çık かけて行った。

ある日彼が、例のとおり、土台石の一つに腰をおろして、お鶴から来た年賀状を雑のうから取り出し、じつとそれに見入っていると、いつの間にか、仲間たちが彼の背後に忍びよって来た。

「次郎ちゃん、何してんだい。」

次郎は、だしぬけに声をかけられて、どぎまぎした。そして、なにか悪いものでも隠すように急いで絵葉書を雑のうの中に押しこみながら、彼らのほうにふり向いた。

「ほんとに何してんだい。」

仲間の一人が、いやにまじめな顔をして、もう一度たずねた。

「この石が動かせるかい。」

次郎はまごつきながらも、とっさにそんな照れかくしを言うことができた。そして、言ってしまうと、不思議に彼のいつものおうちやくさがよみがえってきた。

「何だい、こんな石ぐらい。」

仲間の一人がそう言って、すぐ石に手をかけた。石は、しかし、容易に動かなかった。するとみんながいつしよになって、えいえいと声をかけながら、それをゆすぶり始めた。間もなく、石の周囲にわずかなばかりのすき間ができて、もつれた絹糸を水にひたしてたたきつけたような草の根が、まっ白に光って見えだした。

次郎は、大事なものを壊されるような気がして、いらいらしながら、それを見ていたが、

「ばか！ みんなでやるんなら、動くの、あたりまえだい。」

と、いきなり彼らをどなりつけた。

「なあんだい、一人でやるんかい。」

みんなは手を放した。

「あたりまえだい。僕だって一人でやってみたんない。」

「何くそっ。」

最初に石に手をかけた仲間が、また一人でゆすぶり始めた。が、

一人ではどうしても動かなかった。

「よせやい。動くもんか。」

次郎はそう言つて雑のうを肩にかけると、さつさと一人で帰りかけた。

「ばかにしてらあ。」

仲間たちは、不平そうな顔をして、しばらくそこに立っていたが、次郎がふり向いても見ないので、彼らもしかたなしに、ぞろぞろと動きだした。

だが、土台石も、夏が近まるとすっかり取り払われて、敷地は間もなく水田に変わった。そして今では、どこいらに校舎があつたのかさえ、見当がつかなくなってしまうている。

（下村湖人「次郎物語」）



正三はまたひとかどおとなのような口ぶりで、「だいじようぶさ。ぼくがついて行くんだから。まあ、心配しないでください。」などというのだ。

それを聞いていると、矢牧はふと昔のことを思い出した。彼がちょうど今の正三の年に中学二年生の兄と二人で、夏休みに父の郷里の四国へ行ったのだ。

天保山という棧橋から小松島行きの船に乗ったのが夜であった。父といちばん上の兄が見送りに来てくれた。(このとき、長兄はたぶん、中学五年生であった。どうしていっしょに行かなかったのか、それは覚えていない。)

矢牧は、夜のことを覚えている。船の出発は朝とか昼間で、それも晴れた日には気持ちのいいもので、そんなときはいかにも出帆という広々とした感じがするものだ。

ところが、夜の船着場というのは、昼間とはすっかり違った空気が漂っている。それはとてもわびしい感じのするものだ。そのときは中学二年生の兄が矢牧の保護者であった。そして矢牧は兄と二人で旅行を心細くもなんとも思っていないかった。

兄のほうは家を出るときまではゆうゆうとしていたのだが、いよいよ船に乗って出帆の時刻が間近になると、変になってきた。父がアイスクリームを買ってきて

「ほい、これ。」

といつて渡しても、心はアイスクリームになく、ただ受け取るばかりで、あとは父と兄がなんといつても、ただ「うん、うん。」といつていた。

そのことは、後になって父がよく思い出して笑いながら話したので、兄弟の間では有名になってしまったのだ。

矢牧はそのとき、兄が心細い様子をしていて、父の眼には今にも涙ぐみそうに見えたということは、ちつとも気がつかなかった。たぶん、安心しきっていたのだろう。

兄にしてみれば、生まれて初めてのひとり旅であり、それに小さい弟を連れてあるので、なおのこと責任が重く、船がまだ港を離れないうちに、(これはたいへんなことになったぞ。)という気持ちでいっぱいであつたにちがいない。

四国の山の奥にある父の郷里には、祖父と叔父がいる。そこまで行くのには、この船がある朝、小松島に着いて、それから汽車に

乗りかえて徳島まで行き、そこからまたバスに乗っておおかた一日かかるのだ。

その道順を思っただけで、出発の日まで兄の心をみだしていた、親から離れて単独旅行をする愉快さは、たちまちどこかへ消え去ってしまったのだろう。

何をいわれても「うん、うん。」とだけしか返事しなかった頼りなげな兄のすがたは、初めて子供二人だけ旅行に送り出す父の心に深く印象に残ったのだ。

その夏休みからも二十何年もたつて、いまは矢牧がそのときの父の立場になつていたのであつた。

(庄野潤三「ザボンの花」)



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

春になると、隣家の庭の白木蓮が一斉に花を開く。その姿は薄闇の中で眺めるのがいちばん美しい。しかし、いま書きたいのは隣家の木ではない。身近な花の美しさによって呼び出されたような、もう一本の木のことである。

ある日の午後、階下の西向きの窓からぼんやり外を見ていた。そのころまだわが家の西側に建物はなく、空き地ぞいの道を隔ててかなり遠くまでの景色が楽しめた。ふと気がつくとき、道の向こうの家の庭木の間から一本の白い樹木が立ち上がっている。いや、満身に白い花を飾った丈高い木が目に見えこんでいたのだ。その家の庭にある木ではない。更に遠くに立っているものが庭木ごしに望まれたのだ。おそらく、木は以前からそこにあつたのだらう。ただ純白の花をまとうまで、こちらが気づかなかつただけに違いない。白木蓮にしては、丈が少し高すぎる。しかし辛夷にしては、あまりに花が大ぶりで木の全体を包みすぎている。家の者に尋ねても、その木を見るのは初めてであり、どのあたりに生えているのか見当がつかぬという。まるで突然に出現したかのような、白く燃える美しい木だった。

次の日も、次の次の日も、木は同じように立っていた。というより、更に白い輝きをまして西の窓外に目を誘った。ついにたまらなくなつて家を出た。駅とは反対の方角なので、平素はあまり足を運ばないあたりである。歩き出すとすぐに相手は見えなくなつた。道からは近くの家の庭木がじゃまをするからだ。はじめは駅へと向かい、次に右折を二度重ねてもう一本先の道へと曲つてみた。わが家からの見え方からすれば、その道の左右いずれかにあるはずだ。最初の日、とうとう発見することはできなかった。帰つて西側の窓辺に立つと、木はくつきりと曇り空を背景にたたずんでいるのだつた。

翌日、二度目の探索におもむいた。そして前日と同じ道の右側に、二階家の壁に隠れるようにして花を咲かせている大きな白木蓮を見つけ出した。そしてひどくがっかりした。近くにそれらしい木はないので間違いないと思われるのに、見る角度が異なるためか、相手は窓から眺めたときのような気高い美しさをたたえてはいなか

つた。こんなことならさがし出さなければよかった、といたく後悔した。

それから間もなく、空き地に家が建てられて西向きの窓からの眺めを奪った。遠い白木蓮はわが家の視界から失われた。その木はいま、ぼくの中だけに一年中白い花を咲かせてひっそりと立っている。

（黒井千次「五十代の落書き」）



人間というものには、年齢上のどの時代にも、昔は好かったなあ、
という追憶の溜息が従いてくるようです。

私の最初の記憶は、お手伝いさんに背負われていた私です。

四つか五つの頃まで、私は、生まれ故郷の山の中の小さい温泉場に
育ちましたが、それから町に出て、わたしが小学校へ通った頃には、
もう私には、町に住むようになって今の自分より、山の中の温泉場に
いた幼い私の方が幸福だったと思う心が生まれていました。この心持
ちをごく簡単に説明すれば、現実を厭う心の道草と言って好いかもし
れません。

私にとつては、追憶は人生の清涼剤です。

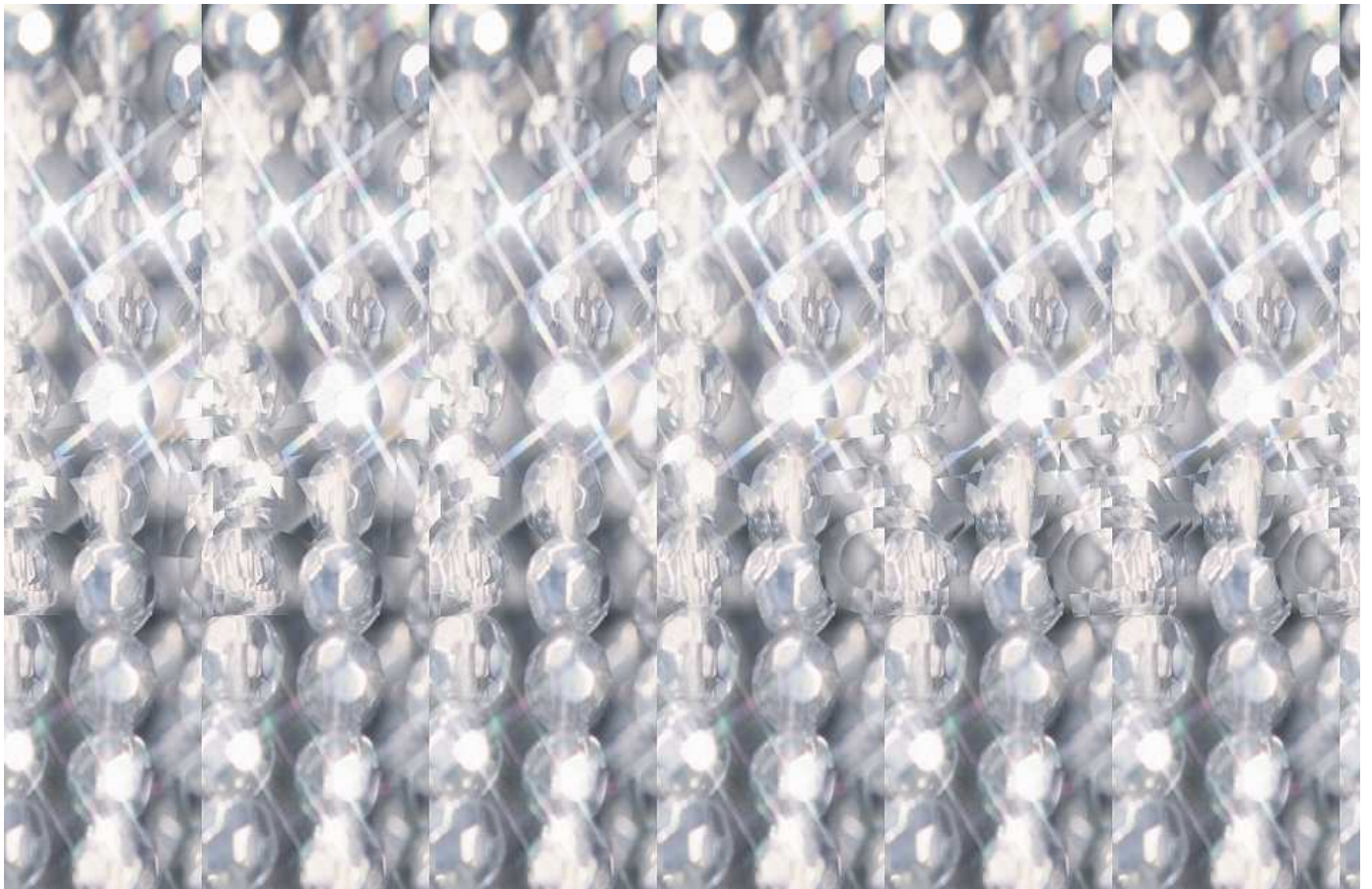
こんな傾向を持つ私は、よく過去の私に通れました。そして過ぎ
去った私は、いつも、今の私よりどこか幸福だった気がします。

追憶によつて生まれた昔の幸福は今の自分を幸福にしてくれるほど
著しい力を持ったものではありません。けれどそこから幾分の慰めは
来るようです。追憶は人間を幾分でも慰めるために、あの消極的な一
種なつかしい慰めを置いて行くために、時々やつて来るのだ。追憶と
いう心のはたらきは、人生の避難所の一つとして人間に与えられた宝
玉だ。——私はいつとなくそう考えるようになりました。

（尾崎翠「花束」）（文章の一部を編集した）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01



冬が近づくと、昆虫の変身は、一時ストップをかけられる。それは、きわめて合理的だ。木の葉もないときに毛虫がかえつても、しやうがない。花のない季節にチョウが生まれても、死を待つだけである。虫たちは、冬は休眠に入る。

休眠に入った虫は、ある意味で仮死状態にある。ひどいときには完全に凍ってしまったている。呼吸もほとんどおこなわない。物質交代は、ほとんど止まっており、典型的な場合は運動もしない。

生物は動いているときに生物なのだが、それをほとんど止めてしまふのだから、そこには何か特別なしかけがある。本来、前へ前へと進んでゆくべき変身のシナリオを、一時がっちりとして止めてしまうしかけである。このしかけがどんなものか、くわしいことはまだわかっていない。とにかく、日本のように季節変化のはげしい温帯や、さらにもっときびしい寒帯にすむ虫は、大部分このしかけをもっている。

休眠に入った虫は、こういう「安全に停止した」状態で、寒く

乾いた、ひもじい季節をのりきつてゆく。すべてがほとんど止まっている以上、これらの悪条件は苦にならない。――彼らは、体の外も中も武装して、じつと冬を耐える――われわれはそう考えがちである。

だが、このイメージは、まちがっている。彼らは決してそんなに受け身ではない。むしろ彼らは、きびしい冬を要求すらしているのである。

休眠に入った虫の「停止のしかけ」は、ただ暖かくなったからといってとけるというものではない。昔からたくさん研究者が、

休眠に入ったばかりの虫に、そんな苦しい状態をすごさせまいという温かい親心からか、よい条件を示してやった。つまり、彼らを暖かいところにおいてやったのである。しかし、親の心は通じなかった。

虫たちは、いつまでも休眠をつづけ、さめることがなかった。翌年の春になって、戸外の寒さにふるえていた虫たちがぞくぞく休眠からさめ、変身を終えて舞いだしても、文字どおり温室育ちの休眠虫たちは眠りつづけていた。そして、ポツリ、ポツリと死んでいった。たまに眠りからさめて変身をとげたものがいっても、

そのひよわさはあわれをもよおすものがあつた。

親心を示すなら、彼らを冷蔵庫に入れておくべきだったのである。休眠の過程は、じつは決して単なる停止ではない。その間にやはり何かが行進しているのである。具体的に何がおこっているかを示した研究もいくつかある。とにかく、秋、休眠に入った虫たちは、積極的に寒さを必要とする。暖冬異変は、スキー場にとつてばかりでなく、彼らにとつても迷惑である。なぜなら経過すべき寒さ、それによつて、目覚めへの過程が行進すべき寒さを、十分に得ることができないからである。

冬の寒さをのりきるといふ深刻な課題に直面した虫たちは、このような積極的方法を発明した。逃避がつねに敗北にしか終わらないことを考えてみれば、これはじつにみごとに解決法であつたといえよう。

（日高敏隆「昆虫という世界」）



「自分」の一生を生きるというが、「自分の」といつても、どうにでも自分の思うとおりになるものではない。それどころか、むしろ、わたしたち一人ひとりの一生、一人一人の存在は、現実の社会関係の中で、様々な条件づけられ、決定されている。自分の生まれた国、生まれた社会、生まれた時代、生まれた境遇、等々によって、わたしたちはそれぞれ、自分の意志や意向とかかわりなく、一定の過去を背負っている。また、その延長上におのおの自分の歩いてきた道がある。そこには、勝手に帳消しにしたり抹殺したりすることのできない、人それぞれの生がある。

たとえ自分から見て他人の置かれている立場がどんなにうらやましくとも、また逆に、他人の不幸な境遇にどんなに同情しても、わたしたちは個人として他人とすつかり入れ替わることはいできない。他人の立場に身を置くということは、わたしたち人間の相互理解のための大切な行為であり、人間の重要な特性の一つである。けれどもそれは、一定の限度の中で可能であるにすぎない。結局自分は自分でしかあり得ない。自分は自分だけで成り立っているのではなく他人との関係のうちに成り立っているにしても、それでも自分は自分でしかあり得ないのだ。そして、このように自分は自分でしかあり得ないということの確認は、決して尊敬、愛、友情、哀れみ、共感などに基づく他人との結びつきを断ち切るものではなく、かえって他人との結びつきを強めることになるだろう。

こうして、われわれ一人一人によって、「自分」の一生とは、「ほかには成り替われない」一生ということになる。しかし、だからといって、それは何もかもすべてが決定されていて、自由な選択が全くできないということではない。これまでの過去については、条件づけとして、動かすことができないにしても、言い換えれば、それぞれに固有の過去を背負い、幾重にも条件づけられてはいても、その上でなお多くの可能性や選択の余地が残されている。それが人の一生というものであろう。また、たとえ一人一人の背負っている過去は動かせないとはいっても、それは事実としてのことにすぎない。一人一人がその過去を、過去の諸事実を、どのような意味を持ったものにするかは、現在の、またこれからの問題である。過去による限定は意味にも及んでないわけではないが、それは絶対的

なものではない。更に、今後の可能性ということになれば、生きていくその時々各人の道の選び方や決断、それに意志的な努力によって大きく変わり得るのである。

各人の道の選び方や決断といったが、それははつきりした人生の重大な岐路に立つての選択や決断のようなものばかりではない。選択や決断は、もっと目立たないかたちでわたしたちの日常的な生活の中でも求められることである。テレビやチャネルを選ぶことだって選択であり、テレビを見ていていつ立とうかと思うのだって決断である。選択し、決断することは、わたしたちが情性に流されるのではなく、自覚的に生きようとすれば、いつでも伴ってくる。だからそれは、毎日毎日の生活の中で絶えず新鮮なものを見いだすこと、またそういう在り方を積み重ねていくことにも結び付くのである。その場合、偶然的な要因が大きく働くこともあるだろう。それをも取り込んで役立てつつ、一人一人が職業のうちにせよ、社会的な活動のうちにせよ、趣味のうちにせよ、自分の進む道を見いだすことができる、各人それぞれ的一生は、いっそう「自分」のものになる。

（中村雄二郎「哲学の現在」）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

日本の人里の、何もきわだって美しいといえない風景の中にも、最近とくに知られるようになり、若い人たちが訪れる場所ができ始めた。京都の嵯峨野などは、そうした場所の一つに数えられるだろう。また大和の山の辺の道も、だんだん人気が出てきたようである。だが、これらの場所は、実は、完全な自然の風景ではなく、背後にひかえている歴史の重み加わって、その価値を高めているのだ。風景を考えると、これは非常に重大な点である。

その地の歴史を知ることにより、平凡な風景、ありふれた小山が、見る人びとをたちまち深い感興を催す。きっかけは、歴史だけではない。芭蕉の俳句に詠まれたいくつかの風景は、その地に行つて、ゆかりの風物を見る現代人の心に深い感慨を呼び起こす。風景は、見る人の心によって変わる。風景の価値は、その現在の実体と、過去を思う観賞者の心の交渉のうちに成立する。

風景の要素には、歴史が大きくかわるだけではない。自然に対する知識が、なかなか大きく作用する場合がある。名もない花が咲いているのをただ見るだけでなく、その花の名が全部わかり、そのあるものがその土地にあることの意外性といったことがわかり、その育ちぐあいの良さ悪さまでわかつたら、興ざめになるどころかかえっていつそう印象が深まるというものだろう。向こうの丘陵の雑木林の中に、若葉をつけたコブシの木の群れを見だし、二か月前の花のころの光景を想像に描くのは悪い趣味ではない。まわりで鳴く小鳥の声を聞いて、その鳥の種類がわかるのも楽しい。ツキヒホシポイポイと形容されるサンコウチュウの鳴き声を、珍しくも人里近くで聞いた時のうれしさは、風景のよさと必ずしも異縁ではない。

日本の風景で、今まで人がほとんど注意を払わなかったものに生け垣がある。農村の住宅は生け垣で囲った家が多い。農村の生け垣用の樹種は、都会の住宅地より単調な場合が多いが、そのかわり年を経た貫禄のあるものが少なくない。生け垣というものは、手入れのぐあいで、実にさまざまな態様をしていて、見る人の心を刺激するものである。

人の住んでいる風景と関係するものには、もっと人間くさいもの

がたくさんある。向こうのあの松の下の家のおばあちゃん梅干を漬けるのが上手で、その隣の家の息子は野球選手で甲子園に出場したことがあるなどと知っていたら、その興の深さはどうだろう。そんなことは、風景とは関係ないと言う人がいるかもしれないが、私は何か関係があるという意見である。

日本の、人の住む風景には、心温まる潤いと豊かさをそなえたものが、いたるところにある。それは、いろいろな自然・人文の知識に裏打ちされいつその興趣を盛り上げる。自分もそこに住み込んで、朝夕その中に溶け込みたいような風景……いや、それよりも「風土」といったほうが適切な場所が、まだまだ、日本にたくさん残っているのである。

（中尾佐助「私たちの風景」）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

読解問題 4月4週分

問1 読解マラソン集1番「その日、天気はよかったが」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 正治が倒れている周囲に集まってきたクラスメートは、正治のことを少しおもしろがっていた。

B 正治は、みんなと違うことで、自分を認めてもらおうとしていた。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集1番「その日、天気はよかったが」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 遠山らクラスの代表たちは、心から心配してお見舞いに来てくれた。

B 正治は、先生の忠告を聞いているうちに、自分がまちがいを犯してきたように思い始めた。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集2番「私がエベレストを初めて見たのは」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 圏界面の上では、空気はほとんどなくなる。

B 圏界面の上には、雲が作られることもない。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集2番「私がエベレストを初めて見たのは」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 地球の最高峰のヒマラヤの高度が、圏界面の高度に影響しているかもしれない。

B 対流圏では、成層圏に比べて岩石の風化が進行しやすい。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集3番「犬と人間の歴史をふりかえてみると」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 地上に降りた人間の祖先は、肉食をする必要に迫られた。

B 類人猿たちの食物は植物が主なので、肉食獣の犬とは仲がよかった。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集3番「犬と人間の歴史をふりかえてみると」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 犬は、えさをくれる人間を次第に主人だと思うようになっていった。

B 人間と犬が近くにいることは、両者にとって利益だった。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集4番「私たちはこれまで、木は時代遅れの」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 工業材料をできるだけ自然の木に近づけることが進歩だと考えられていた。

B 人間の作った改良木材は、木の欠点を補うものとはならなかった。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集4番「私たちはこれまで、木は時代遅れの」を読んで次の問題に答えましょう。

○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 木は、他の材料と比べてその優秀性を数量的に証明することが難しい。

B 特に優れたところと特に劣ったところのないことが、木の優れた点である。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 5月4週分

問1 読解マラソン集5番「古くから森林は人間に」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 日本文化が木の文化であるといわれるのは、つい先ごろまで木材が主力燃料だったからだ
B 昔の日本では、落葉も主に燃料として活用されていた
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集5番「古くから森林は人間に」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 森林の働きの一つに、気候を穏やかにするというものがある
B 今後の森林は、木材資源として見るのではなく、環境資源として見ることだ
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集6番「旧校舎のあとには」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 次郎は、仲間に声をかけられたので、お鶴から来た年賀状を見ることができなかった
B 次郎は、ときどき仲間たちからかわれることがあった
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集6番「旧校舎のあとには」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 次郎がみんなを怒鳴りつけたのは、大勢で石を動かすのがずるいと思ったからだ
B 次郎は、土台石を自分の心にとって大事なものと考えていた
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集7番「正三はまたひとかどのおとなのような」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 矢牧は、兄と二人の旅行でも、父たちが見送りに来てくれたので、心細くなかった
B 兄は、自分が保護者の役割で行く旅行に心細さを感じていた
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集7番「正三はまたひとかどのおとなのような」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 矢牧は、兄の不安な気持ちを理解していなかった
B 正三と矢牧の関係は、兄弟ではない
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集8番「春になると、隣家の庭の」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 遠くに立っている白い花の木は、作者が気づく前からそこにあった
B 駅は、作者の家の東側にある
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集8番「春になると、隣家の庭の」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 近くで見る白木蓮は、遠くで見たときよりも気高くなかった
B 空き地に家が建てられ、その白い花の木も、もうなくなった
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 6月4週分

問1 読解マラソン集9番「人間というものには」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 人間は、年をとればとるほど、昔はよかったと思うようになる
B 私の最初の記憶は、お手伝いさんにせおわされていた私である
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集9番「人間というものには」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 私は、町よりも山に住んでいたときの方が幸福だった
B 追憶は、人生の避難所とはならない
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集10番「冬が近づくと、昆虫の変身は」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 休眠に入った虫は、完全に凍っても生きている
B 休眠に入った虫は、厳しい冬をただじっと耐えて乗り切る
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集10番「冬が近づくと、昆虫の変身は」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 休眠に入ったばかりの虫を暖かいところに置くときに休眠からさめる
B 「逃避がつねに敗北にしか終わらない」というときの「逃避」とは、暖冬異変などからの逃避である
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集11番「『自分』の一生を生きるというが」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 自分の一生が自分の思いどおりにならないのは、他との関係があるからだ
B 人間は、他人の立場にすっかり身を置くことはできない
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集11番「『自分』の一生を生きるというが」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 過去の意味は変えられないが、未来の意味は変えることができる
B 日常生活の小さな決断は、大きい決断に比べて、偶然的な要因が働くことが多い
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集12番「日本の人里の、何もきわだって」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 同じ風景でも、見る人の知識によって感動の受け方が異なる
B 風景は、予備知識を持たないで見る方がありのままに感動できる
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集12番「日本の人里の、何もきわだって」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 風景を見るときには、自然に対する知識も役に立つ
B 風景とは一見関係のないように見える人間くさい知識も、風景の見方を深める
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

4 ~ 6 月

小1 コード: nane パ ス:	小2 コード: nane パ ス:	小3 コード: nane パ ス:
小4 コード: nane パ ス:	小5 コード: nane パ ス:	小6 コード: nane パ ス:
中1 コード: nane パ ス:	中2 コード: nane パ ス:	中3 コード: nane パ ス:
高1 コード: nane パ ス:	高2 コード: nane パ ス:	高3 コード: nane パ ス:

1 ~ 3 月

小1 コード: nane パ ス: PDF	小2 コード: nane パ ス: PDF	小3 コード: nane パ ス: PDF
小4 コード: nane パ ス: PDF	小5 コード: nane パ ス: PDF	小6 コード: nane パ ス: PDF
中1 コード: nane パス ス:	中2 コード: nane パス ス:	中3 コード: nane パス ス:

ス： PDF	ス： PDF	ス： PDF
高1 コード： nane パ	高2 コード： nane パ	高3 コード： nane パ
ス： PDF	ス： PDF	ス： PDF